

許慎の原序により近いことを確認し、あわせて、両漢の際において序なる文体がいかなるものとして人々に認識されていたか、その一端を探ってみたい。

後漢に於ける古文としての『周礼』の位置付け

博士後期課程 三年 佐川 繭子

『周礼』は、後漢にあっては師承が比較的明確である。かつ複数の注釈があるように、後に三礼として統括される『儀礼』『礼記』に比しても、遜色なく学習されたことが窺われる。

しかし、『周礼』は『古文尚書』『左傳』のように古文テキストとして表彰されたことは殆どない。これについて、『周礼』は王莽が支持したために、皇帝に忌み嫌われたという見方がある。が、光武帝期から明帝期にかけて準備された礼制は、王莽の建言による元始の故事によっている。これによれば、王莽は必ずしも忌避されているわけではなく、改めてその理由を検討する必要がある。

今回の発表では、当時の古文学の様相、『周礼』学習者の意識等の検討を通して、古文としての『周礼』の位置付けを試みる。

千宝『搜神記』考

——『搜神記』の語る歴史——

博士前期課程 二年 河野 貴美子

『搜神記』は、西晋末から東晋始めを史官として生きた千宝の手に

なる著である。『搜神記』は、さまざまな怪を取り上げているが、中には、歴史的人物、歴史上の事件に関わるエピソードも数多い。それでは、『晋紀』という史書も残した千宝は、『搜神記』において、それらの「歴史」をどのように扱い、語っているのだろうか。

発表では、『搜神記』が扱う歴史的人物や歴史上の事件を史書の記載と比較し、また、史書などに残された千宝の言動の記録を通してその人物像を探り、史官千宝による志怪小説『搜神記』が、いかなる意識をもって編纂されたもののかを探っていききたい。

『孟子』養心莫善於寡欲章について

博士後期課程 二年 石原 伸一

「孟子曰、養心莫善於寡欲。其為人也寡欲、雖有不存焉者寡矣。其為人也多欲、雖有存焉者寡矣。」（『孟子』尽心篇下第三十五章）

この章は、欲望の否定肯定、心と欲との関連性といった問題と絡んで、後代思想家たちの論題の一つであった。

周敦頤は、寡欲の説を徹底させ、「予謂、養心不止於寡而存耳。蓋寡焉以至於無。」（『周子全書』）と「無欲」を主張する。朱熹は欲を私欲に限定して周敦頤の説に理解を示すが、『孟子集註』には程頤の「所欲不必沈溺、只有所向、便是欲。」というリゴリスティックな欲の解釈をとりあげるのみで、「無欲」についての言及は避けている。以降朱子学者には、この「無欲」と「寡欲」との対比の中で解釈するものが目立つが、一方、「心」に重点を置いた新説が登場し、明代には論議が活発となる。その代表的な説は、南宋楊簡の「人心即道」

説、明代王守仁の「致良知」説、同じく王畿の「格物」説をそれぞれ「寡欲」、「無欲」と関連づけるといった心学的解釈である。今回の発表は、宋代・明代の主立った解釈を考察し、解釈史全体を通して宋明の思想史における「欲」の問題の一端を明らかにすることを目的とするものである。
